

令和6年度袋井高校第2回運営協議会【概要】

日時： 令和6年10月31日(木) 午後2時45分から4時45分

場所： 袋井高校 榎緑館

参加者： 委員5名(2名欠席)、校長、副校長、教頭、探究学習担当教諭

主な内容：

1, 探究活動の活動報告

2, 探究活動中間発表会の見学

3, 協議(中間発表会を見ての感想及び意見を中心に)

- ・新しい気づきが見られた。見た班は健康寿命について考察した後、食品会社に聞き取りに行っていた。興味から行動につながられていた。
- ・去年より自主的に行動をしながら、深めることができていた。しかし、発表の態度に緊張感がない班があった。慣れが見られた。そのために外部の者を入れていると思うが、発表態度に関する指導も続けてほしい。
- ・フィールドワークという言葉をもっと広くとらえてほしい。「お店に行ってみる」「友達にアンケートをとる」だけでは広がり限定的になりがち。新聞紙やニュースなどのメディアも含めてフィールドワーク。例えば昆虫食について友達にインタビューするだけでは、昆虫食のイメージがせいぜいで、昆虫食が産業として成り立っているところまで見えてこない。
- ・飢餓をテーマに掲げて、食品ロスについて触れ、ロスをなくすために嫌いなものをどうやって食べたらいかが結論にグレードダウンしている。大げさなテーマとチープな結論のちぐはぐさや表面的な感じが目につく。差別をなくそうと言っても、差別が何かをとらえられていない。「ふらっと」はいくつかの班のテーマに沿って、専門の方と生徒たちをマッチングしてきたが、全員揃わない。生徒や保護者に探究が大切な授業の1つだということが浸透していないのではないか。
- ・前回より、生徒たちがデザイン思考に慣れてきている。が、多くの班が「解決はこのアプリで」と結論づけ、パターン化してしまっている。身近なことが取り上げられている。自分事から始めて、どこかの段階で対象を広げるのもよいかも。良いものもあり、玉石混合。くだらないことを大真面目に考えることにも意義があるとして、その中で自分たちで考えるということをしてもらいたい。

→テーマそのものよりも、やっていく中で見つけることが大切。コミュニケーションをとりたいというテーマで結論がアプリとなっても、そこに至る過程で2人でなく3人だと会話が続けていけるといふ発見をしている。これが大切と考える。思考が中学生レベルなものも多い。高校生はもっと大人の思考ができることを期待する。

→慣れ故の問題点がある。最近の高校生は内向きという課題を克服するために、探究担当者は心理的安全性を大切に学びをデザインしている。幼いものであっても、語れる意見がある。探究活動の意義を真摯に受け取れるように指導を続けたい。

・プロトタイプと言っても、形のあるものを作ることに縛られる必要はない。どうしていくという道筋、計画でもいいという広がり欲しい。

・改善されていた。去年は床の私物で前に進みたくてもままならなかった。ポスターの枚数や掲示の仕方も統一されて見やすかった。ただ、文字がひどく小さい班があった。

→内向き、主体性のなさは本校に限らず現代の高校生病。袋井が成功するなら、ほかの学校にも広められるロールモデルになる。他の問題点は、何を探究しているのかが見えていないこと、社会的意義どころか自分にとって何を探究しているのかが明確でないこと。蛇行しながらも発見して、のめりこんでいってくれば、進路やキャリアにつながっていく。今の3年生にもそういう例がある。入学当初SEになりたいと思っていたが、探究で宇宙をテーマにする中で幼少期からの興味関心を思い出し、その分野への進学に挑戦している。

4, その他

第3回運営協議会は、2月13日(木)14時30分開始。最終発表を見て、学校評価も実施する。

1月下旬に学校評価の関連資料を送付するので、評価をして持参していただきたい。